

ジャグパル

JugPal

2007年1月8日 第36号



インタビュー

【大道芸人 TOMI さん】

今回はジャグリングを主体とした大道芸で8年以上の間、国内外問わず第一線で活躍されている TOMI さんの登場です。

大道芸との出会い

中学生の時からバンド活動(ロック)を始めて、その頃はバンドが人生の全てで、当然将来はプロのプレイヤーになるつもりだった。

高校二年の時に、静岡大道芸ワールドカップにボランティアスタッフとして参加したが、世間的にはそんなに

「良い子」でなかった自分がボランティアなんて、あり得ない話だったけど、逆に自分には合わないであろう活動、その意外性に惹かれてやってみた。それが大道芸との出会い。そう言えばその時に見たテリープレスさんの演技には、風船だけであれだけの凄い世界を創り出すのでビックリした覚えがある。

スタッフで参加している時に「大道芸サークル」が作られることを知り、しばらくして入会し、サークル活動の一環として大道芸をするようになったが、それは単に人前に出るための練習、つまりバンド活動の一助としての参加のつもりだった。

高校を卒業してデザイン系の専門学校に通い出し、次第にサークルの中心的存在で活動するようになり、イベント出演の依頼が入るようになって、デザインの勉強もバンドの活動も好きだったけど、バンドではセミプロとしての活動はするものの満足な収入を得られない状態だったし、デザインで生活できるほど技術や才能があったわけじゃなかったから、専門学校卒業と同時に大道芸で食っていきと決心した。

人生の転機

高校生の時に先生が言っていた。高い目標を達成するには『願掛け』をしたら良いと。しかも断つものは自分にとって大切なもの、やめられないものの方が良いんだと。

そこで自分は大道芸で食っていきたいから、中学からやっていた音楽を止め、三年間大道芸をやってみてダメだったら就職しようと決めた。

結果、専門学校を卒業した20才から三年間で、そこそこ収入が得られるようになり生活できそうだと実感し、今に至っている。



大道芸人 TOMI さん



大道芸の良さ

大道芸は一人でポーンッと街に出て、どんな職業の人でも、かつ老若男女問わずに何十人もの人を喜ばせ、楽しませることができる。単純に凄いと思うし、こんなこと他には例がないんじゃないかな。

道を行き交う人はそれぞれ別々の目的があるわけで、それにも関わらず自分という演者に興味を持たせ、足を止めさせ、集めて見る気にさせる、これ自体が一つの大きなパフォーマンスであり、これぞ大道芸の醍醐味だと思う。

大道芸に対するポリシー

TOMIという芸人が大事にしているのは、ショーをお金のためだけにはやらないということ。

もちろんギャラや投げ銭といった対価は欲しいし、評価してもらいたいけど、何のためにやっているかといえば自分が楽しんで、お客さんにも喜んで楽しんでもらうためにやっている。

端的に言えば、自分のやりたいことだけやって投げ銭をもらっている。もしお金のためにやるんだったら、お客さん(クライアント含む)の欲する内容に変えたりすれば、正直もう少しは稼げと思うが、儲けのためのショーをやると大道芸が嫌いになるから、そういったショーはするつもりがない。

逆にお金に困っているくらいの方がいいと思うし、だからバイトとかはしないし、給料をもらっちゃうと自分に甘えちゃうからせっぱ詰まっていないとダメなんだ。

貯金した方がいいよと後輩にも言われるけど(笑)、しない。浪費している訳ではないけど金は貯めるものではなく使うものだと思っているし、バイトはしないというルールを作ると、大道芸をやらなきゃならないし、お金のためのショーはやらないというポリシーがあるから、大道芸の回数を増やしてこなさなくてはならない。練習は嫌いでほとんどしないけれど、パフォーマンスの回数をこなしているから結果的に練習しているといった感じ。

大道芸は楽しいものだから、そして自分が楽しくないとやってられないから、それには大道芸とかジャグリングを嫌いにならないように努力することが大切で、大道芸をいつまでも好きで続けるため、大道芸を嫌いになるようなトレーニングはしない。例えば一日何時間は練習しなければダメとかいったルールは作らない。

殿様状態と言われるかもしれないが、やりたいことしかやりたくない。つまりお客さんに受け入れられてもらうためでも、自分のやりたいベクトルの上でショーを構成したい。言い換えると客ウケのために自分のスタイルは崩したくない。

今どきの芸人

今は昔と比べると大道芸はやりにくくなったと感じる。

特にヘブンアーティスト制度での指定場所以外の所ではやりにくくなった。ヘブンアーティストでない芸人は何処で大道芸をすればいいの？どこで芸を磨けばいいの？許可取れば出来るんだから、許可取ってやりなさい、取り締まりにもそんな風潮を感じる。

そのせいか大道芸フェスティバルと言っても、普段「道」でやっていないような芸人の参加が増えてきた。例えば道ではできないから普段は体育館でしかやったことがなくイベントのみに出ているような芸人、お客さんを自分では集められない芸人、あるいは曲(BGM)すらも自分で変えられないような芸人…つまり道での経験が全くないような、大道芸人とは呼べないような芸人。

自分は幸いにも静岡という大道芸を許容してくれる、比較的環境の良いところで鍛えられたせいもあるが、道で芸を披露しようとするのなら、例えばポツンと道に独りで立って、ここで人を集められるか、どうしたら集められるか、そういったことをイメージできなくてはダメなんだ。

そうは言っても昔より良いところは、今はアート系のジャグリング(大道芸)など多種多様な芸も見られるようになったから、その点は間口が広がっているんじゃないかな。

今どきのお客さん

お客さんの反応も昔と比べると決して良いとは思えない。

大道芸が割と日常的なものになってきて、見慣れてきたせい、投げ銭は100円でもいいし、払っても払わなくてもいいんだということを見る側も知恵がついたようで、大道芸自体の知名度が上がった割にはそんなに良くなったとは感じない。

それに今は道具を見て、あぁジャグリングね、って知ったかぶりで見られることも間々あって、今ジャグリングで大道芸を始めようとしても、道具を見てショーの展開が読まれてしまうから難しい。

それに比べて昔はジャグリングなんて芸を見るのはほとんどの客が初めてだった。今は見慣れている人もいるし、もちろん初めての人もあるという、そういった多種多様なレベルの人にどう応えるのか考えなくてはならないから、そこが悩みどころで大変だけど、ショーの内容は時代によって変えていかなくてはならないと思う。

でも自分は他の人とは違うんだということを演技に出せれば、初めての人でもマニアの人でも見て受け入れてくれると思うし、技術的にも高度さが要求されるのはもちろんだけれど、お客さんの予想をどう裏切るか、どうお客さんの足を止めさせるのかが芸人の技量にかかってくる。

だから芸風は替わらないけれど構成とか技術に関してはいつも悩んでいる。まあそれも仕事のうちだ。休日とかはやらないけれど、平日のストリートとかでは実験的にいろいろな技や構成を試している。

つまらなければ金(投げ銭)を払わなければいいのが大道芸の良いところで、あれをやらなければならぬとか、これだけ成功しなければならぬということはない。

これから

2008年にはいつ帰ってくるか決めずに欧州に行こうと思っている。スペイン、フランス、ドイツ…もう計画は立つつあるんだ。

今28才。大道芸で8年間食ってきたけれど、2008年には30才になり、その時が自分の大道芸のスタート時点だと思っている。これがTOMI だと言えるショーのスタート！！

自分が表現したいものが完成して、それを何処でやるか場所を見つけて、見つけた場所でやる。ただそれだけの話。

それは何処でもよくて、日本でなくてもいいんだ。日本とか外国とかは関係なく、自分の表現したものがお客さんに喜んでもらって最後まで見てもらって投げ銭をいただく。つまり自分がきちんと評価される場所にいたい。それだけの話。



< 参考 >

Webサイト <<http://www.tomi103.com/>>

メール <tomi-from-japan@dance.ocn.ne.jp>

[安部 保範]



ブログ風アート見物記

【2006年10月～12月分】

キエフ・オペラ「アイダ」(10月9日/神奈川県民大ホール)

実は初めてのオペラ鑑賞。えっ、オペラってこんなに面白くて興奮できるものだったの!? もっと早くから観ておくべきだったと思う反面、オジサンと呼ばれるこのトシになった今だからこそ楽しめるのか、それはよく分かりませんが、とにかくこのせせこましい日常から超越した「過剰の美学」とも呼ぶべき世界観にはゾクゾクしてしまいます。それに比べてリアルさを重視し効率性と商業性を追求して制作されているであろうテレビドラマのなんとみみっちいことか。絶対に米国文化からは生まれてこないものだな、こりゃ。

春風亭小朝 独演会 (10月13日/銀座プロッサム)

出演者は、林家ひろ木、三遊亭歌武蔵、春風亭小朝。小朝さんはその力量たるや凄い芸人。古典から新作(創作)落語まで、小唄から人情唄まで、オールラウンドなフィールドで変幻自在な話術をもって、観客を惹き付けたら最後まで離しません。

東京スカイパラダイスオーケストラ (10月17日/鎌倉芸術劇場)

いやいやこれまた楽しかったあ！緞帳が開か開かないかでのプラスセクションのヴァ～～ という一音で観客全員がワァ～!! と総立ち。な、何事!? それから2時間立ちっぱなし状態で、身体を揺すったり、ぴょんぴょん跳ねたり、踊ったりと皆各人が思い思いに音楽を楽しんでいる。オジサンも真似して跳ねていたら(with マイ娘)足がつかまりました…(泣)。同じようなジャンルでお気に入りのバンドPE'Zのコンサートにも行ってみたいくなりましたが、その前に体力つけねば。

藤山新太郎 蘇る江戸の手妻 (10月26日/シアターX)

藤山新太郎さん一座による手妻(和妻)は何度観ても楽しめます。それは単純に不思議さだけを我々に見せているだけではなく、それは個々の演技にもこれら一連の演目の流れの中にも「ドラマ」を感じさせるからなのでしょう。そのドラマの正体が何なのかよく分からないからこそ、何度観ても飽きないし繰り返し足を運ぶのでしょうか。まさに「秘すれば花」。

くるくるシルク Vol.6 (10月27日/スタジオP・A・C)

「くるくるシルク」との出会いは1999年の公演「骨のオ・モ・ヒ・デ」でした。ただしその時は現在の「くるくるシルク」のメンバー(立川真也さん、藤居克文さん、高橋徹さん)に、現在欧州・アフリカ等で活動している金井圭介さんを加えた「シルク空」というユニット名での公演でした。それ以降何回か金井さんが抜けた「くるくるシルク」の公演を拝見していますが、ダンステクニックをより多く取り込むなど様々な工夫が見られます。一貫しているのはジャグリングにしてもアクロバットにしてもテクニックを見せて驚かせるというより、三人の間に起こる友情や葛藤等の感情表現をどう展開していくのか、そのストーリー性に焦点が据えられているようです。そういう意味では三人のコンビネーションには益々磨きがかかってきていて安心して楽しむことができます。

第19回 読売GINZA落語会 (11月2日/ルテアトル銀座)

出演者は、桂かい枝、林家いっ平、春風亭小朝、桂小米朝、春風亭昇太。今回は昇太さんに一番笑わせてもらいました。(一言言わせていただく)いっ平！オジサンは気を長くして待っていてあげるからしっかりと精進せいよ。

フィリップ・ドゥクフレの映像世界 (11月7日/渋谷UPLINK FACTORY)

フィリップ・ドゥクフレさんが手がけた映像作品集「KALEIDOSKOP」の上映会と金井圭介さんを招いての座談会(コーディネーターは、ル・クプル・ノワールさん)。フランス国立サーカス大学CNACへ留学した金井さんは、ドゥクフレさん演出による卒業公演「CYRK 13」に参加。座談会ではその公演の時の数々のエピソードを交えながら、ドゥクフレさんが作品を創りだすその手法の一端についてお話し下さいました。

キエフ・オペラ「トゥーランドット」(11月8日/東京文化会館大ホール)

いや～このオペラも堪能しました。特に、特にプッチーニの音楽はイイですねえ～。物語の内容は考えてみれば荒唐無稽で矛盾だらけですが、そんなことは百も承知の助！ワクワクドキドキの計三幕120分間でした。ちなみに「誰も寝てはならぬ」って題名がヘンだなあと思ってたけれど、ようやくその意味が分かりました。

アイリッシュ・ダンス「トリニティ」(11月29日/渋谷Bunkamura オーチャードホール)

アイリッシュダンスは今まで「リバーダンス」「ロード・オブ・ザ・ダンス」「ラグース」を観ましたが、それぞれに趣向が異なっていて楽しめます。このカンパニーはシカゴ生まれということもあり、プログレッシブさを前面に出そうと様々な舞踏や音楽を取り入れていて、これってアイリッシュダンス？と首を傾げたくなるようなところもあり、伝統性を重んじたラグースとは対極をなすような気がします。ただ私にとってはあまりにリバーダンスのインパクトが強すぎたので、アイリッシュダンス＝リバーダンスという図式が出来上がってしまっているのも勘違いかもしれません。

リリス・レジデンス・アーティスト 1stジョイントコンサート(12月2日/横浜栄区民センター リリス)

TVドラマ「のだめカンタービレ」にハマってました。月曜は残業せずにすっ飛んで帰っていたし…。今回のコンサートの出演者の一人、清塚信也さんは「のだめ」の中の千秋真一の吹き替えをされていた方で、3月公開予定の「神童」にも吹き替え出演し、2月には初のCDアルバム「ロマンティック・クライム」を出されるとのこと。(ずいぶん宣伝してしまった)

要は千秋に会いたくて演奏会に行ったようなものですが、この「のだめ」のおかげで、にわかクラシックファンになって、CD「ベストクラシック 100」なんぞを毎日聴いております。(汗)

デビッド・カッパーフィールド「Grand Illusion」(12月7日/東京国際フォーラム)

1990年の来日以来、そのたびに欠かさず公演には足を運んで既に今回が8回目の鑑賞。大好きです、デビカパちゃん！もう何も言うことありません。

ちなみに当日はタッキーとジャニーズJr. が来ていて場内は(ファンクラブ会員であろう)女性たちが大挙押しにかけていて異様な雰囲気でした。何しろ開演時刻間際に入ってきたタッキーを見つけるや彼女たちは総立ち！大歓声！でも開演後は彼女たちもマジックを十分楽しんでいました。

マリンスキー・バレエ「白鳥の湖」(12月8日/東京文化会館大ホール)

ロシアのバレエのいわば「ご本家」のマリンスキーによる「白鳥の湖」。皆頭が小さく、長身で脚が長く、まさに八頭身とも言える惚れ惚れとする抜群のプロポーションから繰り出される、優雅で気品ある踊りは本当に美しかった。オーケストラの演奏が始まると、何と表現したら良いのだろう"からだ"や"こころ"に溜まっていた毒気がスウッと抜けていくのが分かる。結果的にスッキリしたというのは往々にしてあるけど、その過程をこうやって実感できたのは初めてのこと。その時感じました。(こうやって劇場に来るのは好きとか嫌いとかいう類のものではなく、"必要"なんだと。

映画「王の男」(12月15日/恵比寿ガーデンシネマ1)

満足度120%。胸を突かれました。泣きました。「どんな映画を観たい？」と聞かれて具体的な題名など、普通は答えられる由もないけれど、こういう映画を、いや"この"映画を観たかったんだと妙に納得するくらい自分にフィットしました。観たい映画に出会えた、やった！という感じ。

映画「オーロラ」(12月27日/日比谷シネシャンテ)

メルヘンチックな作品で、パリ・オペラ座のエトワール3人を含むトップダンサー35人が出演し、彼らの美しい舞踏を中心に、夢のような世界を表現しています。特にオーロラ姫役のマルゴ・シャトリエさん(オペラ座学校学生)が光り輝いていて美しかった。彼女のプロデビューが楽しみ

[安部 保範]



日本ジャグリング界の年表

日本のジャグリングシーンのここ数年での劇的な変貌ぶりにはただただ驚かされるばかりです。この変動の源泉を求めて過去に遡るのもまた一興かと、今回西川正樹さんと私との共同作業で日本ジャグリング界の年表を作ってみました。(別添の年表をご覧ください)

ただし西川さんと私の二人は、関東在住、会社員(業界とは無縁)、そして趣味としてジャグリングを楽しむアマチュアということから、どうしても情報は関東中心で、インターネットがらみの、かつアマチュアの活動に焦点があたりがちになっているように思えます。ここは間違っているよ！これも付け加えたらどう？等々のご意見をお待ちしております。また年表作成にあたって、協力いただいた多くの方々と、そして個別のご質問にお答えいただいた Dr.ニヤートンさん、Mr.アパッチさん、岡田琢身さん、池田洋介さん、LILLIPUTさん、大島幹雄さん、むごん劇かんぱにいさん(順不同)にこの場をお借りして深く感謝申し上げます。



イベント情報

オブジェ・ヴォラン (Les Objets Volants)
『サークル+透明+コントロールポワン』横浜公演
会場: BankART Studio NYK / NYKホール
<http://www.bankart1929.com>

日時: 2007年1月19日(金) 20:00開演
1月20日(土) 18:00開演
1月21日(日) 15:00開演

出演: ドゥニ・ボミエ、シルヴァン・ガルナヴォルト
料金: 一般 3,000円 / 学生 2,500円
予約・問合せ:

ル・クプル・ノワール(Tel&Fax: 03-3816-0239)
BankART 1929 (Tel: 045-663-2812 / Fax: 045-663-2813)

主催者(Le Couple Noir)より

アート・ジャグリングのオブジェ・ヴォラン来日公演をついに実現させる運びとなりました。ヨーロッパで注目を集めるヌーヴォー・シルクのなかから、アート・ジャグリングをお届けします。ドゥニ・ボミエ率いるオブジェ・ヴォランは、ジャグリングを舞台作品として発表しています。ジャグリングによる身体は、オブジェ、音、光、映像など、さまざまな芸術を横断し、ジャグリングのイメージは覆されることでしょう。新たな舞台芸術の発見です。それは、マッドな実験室だったり、カンディンスキーやパウル・クレーからの影響が垣間見られたり、数式が飛び交ったりするなか、ミニマルな音楽とコンピュータ・アートも加わって、存分に楽しめること請け合いです。

<本公演におけるの3つのテーマ>

- ・小津安二郎をフランスが発見したように日本がオブジェ・ヴォランを発見すること
- ・実用的なものばかりが重宝される時代に抗して無駄の王様ジャグリングを楽しむこと
- ・「常人の及ばない驚くべき地点に達している」プロフェッショナルを畏怖すること



ボックス



by いいづかちさ さん

編集後記

ついにというかようやくミクシィに入りました。URLはこちら

http://mixi.jp/show_friend.pl?id=8561914

星の数ほどある「コミュニティ」を探索し始めましたが、「日本奇術界の頭脳 高木重朗」なんてのも見つけてビックリ!(ちなみに高木さんは、大学で入っていた奇術愛好会の偉大なる大先輩)趣味の世界も分野が細かく深く分類され、情報交換も様々なツールにより広域化される一方、分散化される傾向にもあります。かえて何処で何が起きているのか分りにくくなった様な気がしますし、その分趣味への関わり方も多様になりつつあるようです。またヘタをすると情報過多の分、あれもこれもと(趣味の)活動に急ぎ立てられる恐れもありますが、今年も無理をせずゆったりと趣味を楽しみたいものです。

1992年頃から始めた新聞記事のスクラップ。関心あるパフォーマンスの記事を切り抜いては貼って、切り抜いては貼ってと、もう11冊にもなりました。新聞記事はネット上でデータベース化されたり、あるいはCD-ROM化されたりしていますが、自ら手作業でスクラップした記事には何となく愛着があります。パラパラめくると当時の趣味にまつわる思い出が甦り懐かしいものです。

ジャグパルは私という一個人が野次馬根性丸出しで、単なる趣味として発行して、特定の企業、団体あるいはパフォーマー個人に関係しているものではありません。

編集発行人: 安部保範(神奈川県横浜市 在住)

Webサイト JugPal<<http://www.chansuke.net/jugpal/>>

見世物広場<<http://www.chansuke.net/>>

E-mail: misc@chansuke.net

謹賀新年



イノシシの親子連れ